

〔巻頭言〕

年会 2007 を終わって

年会 2007 実行委員会委員長 東京大学生産技術研究所 加藤 信 介†

1 はじめに

2007年度の日本流体力学会の年会は2007年8月6日(月)から8日(水)まで、東京都目黒区駒場の東京大学教養学部で開催されました。参加者は523名(内、学生の新規入会74名)、論文発表件数335件です。これは、前年の2006年の九州で開催された年会と比べて、参加者は同数、発表件数は約1割減の数字となりました。例年、東京以外で開催される年会が、参加者、発表件数とも東京での開催に比べ大きく伸びる傾向を示すのに対し、今回の年会は参加者の落ち込みがなく、会員の年会への関心が例年以上に高かったものと考えられます。

年会の構成は、例年通りオーガナイズドセッションの形式を取りました。今回の年会のため、実行委員会を組織し、実行委員会内で例年のオーガナイズドセッションを参考にオーガナイザーを指名し、オーガナイザーの主導のもと、発表を募りプログラムを作成しています。また、年会恒例の特別講演も4件、企画いたしました。

会場は、ターミナル駅のある交通の要所ではありませんが、東京の副都心の一つである渋谷から二駅目の東京大学の教養学部といたしました。東京での年会を東京大学で開催するのは初めてのことと存じますが、東京駅から45分、羽田空港からも45分の距離で、地の利にも比較的恵まれ、教養学部故にキャンパス内に多くの大教室もあり、まずまず満足いただける会場ではなかったかと思えます。ただ、若干の心残りは、東京大学教養学部には流体力学会会員の教員がなく、会場費のディスカウントが得られず、正規の使用料をお支払いしたことです。教養学部には多くの理学系の教員がいらっしゃいますが、理学分野で流体力学に関心をお持ちの先生方が少なくなっていることをある意味、象徴するようで残念に思う次第です。プログラムは発表件数の関係から、初日の年会の開始時間は9時30分に設定しました。この結果、関西以西の参加者や、東北以北の参加者に

は初日の開会式から参加するためには前泊をお願いする形になりました。最終日の講演は、17時05分が最終となりました。参加者のほとんどは、同日、宿泊の要はなく帰宅が可能ではなかったかと存じます。

2 実行委員会

年会の開催は、理事会から指名されました年会の実行委員長が、実行委員会を組織して運営する形式を取っております。2007年の年会は、2005年、2006年度の流体力学会理事である加藤信介東京大学生産技術研究所教授が実行委員長を務めました。実行委員長は、建築環境工学が専門でその関係からCFD(Computational Fluid Dynamics)の開発に長く携わっていました。流体力学会に合併吸収されました数値流体力学会の時代に、数値流体力学シンポジウムの実行委員長も経験しており、その意味で今回の年会の実行委員長は、二度目の経験ということになりました。2007年の実行委員会委員は、以下の方々をお願いしております。

顧問：菱田公一(慶応大)、委員長：加藤信介(東大)、幹事：大岡龍三(東大)、幹事：飯塚悟(産総研)、飯田明由(工学院大)、石田義洋(東大)、加藤千幸(東大)、佐藤洋平(慶応大)、島田昭男(みずほ情報総研)、杉原祐司(九大)、高木周(東大)、半場藤弘(東大)、藤井邦雄(風環境リサーチ)

実行委員会は、2006年年会からの申し送り事項を参考に、年会の形式を論議し、オーガナイザーの指名と特別講演の候補者の選定を行い、プログラムの作成を進めました。最終的に特別講演は、以下の4名の専門家をお願いいたしました。

神田学(東工大)

「都市境界層における乱流相似則と組織構造」
Michael A. Leschziner (Imperial College, London, UK)
「Statistical Modelling and Simulation of Turbulent Flows: limits, hard lessons and symbiotic relationships」

大島まり (東大生研)

「脳血管障害に関するマルチスケール・マルチフィジックス解析」

金田行雄 (名大)

「乱流の計算科学への試み」

神田先生は、昨今マスコミや行政を騒がしている「ヒートアイランド」に関連して都市域の大気境界層の観察や観察から明らかになった性状を解説していただきました。Leschziner 先生には、乱流のシミュレーションに関して、開発の過程と最新の成果に関して解説していただきました。大島先生には、人体の脳内の血流特に動脈瘤における流れ性状と血管の関係に関してお話しいただきました。金田先生には、乱流のモデリングを計算機シミュレーションの観点から解説していただきました。いずれも実験など実現象の観察と解析から始まり、モデリングとシミュレーションに言及する、興味深い講演となりました。ここで改めて、特別講演をお引き受けいただきました先生方に感謝いたします。

特別講演は、他のオーガナイズドセッションと同時に平行セッションとはせず、参加者が一同に会することのできる大講義室を用いた講演としました。ただ、室内環境に多少問題がありました。大講義室の冷房の利きが悪く、聴衆は講演に感動して汗をかいたのではなく、文字通りの真夏の暑さに汗をかいて講演を聴き入ったようです。今回の年会の実行委員長は、建物内の空調による室内気流や熱輸送を専門にしているだけに、大講義室の冷房の利きが悪いのには、若干歯がゆい思いを致しました。これだけ流体力学が発展、普及しているですから室内の気流による熱輸送性状など容易に予測できるにもかかわらず、室内の冷房や暖房が満足に行えない状況が現実にまだあることは遺憾なことです。ただこれは流れに関する技術の未熟によるものではなく、設計や施工に多くの資源（お金と時間）をかけられないなど他の理由によるものであることは強調しておく必要があります。

3 学会賞受賞式と記念講演

2007年の年会では、学会賞受賞式と受賞者による記念講演が開会式に際に行われました。今年の学会賞は、大阪大学河原源太先生、京都大学木田重雄先生で、講演は河原先生がされました。技術賞は、大阪府立大学の須賀一彦先生が受賞され記念講演をなされました。例年、流体力学会では学会賞の受賞候補者(推薦)が少ないことが問題になっております。

流体力学の今後のさらなる展開を求めるためにも、多くの方々が受賞され、年会での記念講演をお願いすることができるようなれば良いと思う次第です。

なお今回、特別講演を依頼しました Imperial College の Leschziner 先生は、乱流研究の創始者とも言える Reynolds が円管における層流と乱流を実験して見せた英国マンチェスター大学の UMIST に勤務されていました。技術賞を受賞された須賀先生は、乱流シミュレーションで良く用いられる k-e モデルの開発者である Launder 先生と Leschziner 先生の研究室で今回技術賞受賞の基となる研究をされていました。お二人に取っては、印象の深い年会になったものと思います。

4 オーガナイズドセッション

オーガナイズドセッションは、例年実行されるセッションに加えて、流体力学会に様々な分野の流体関連技術者、研究者に参加していただく意図から、建築空調など新たなセッションを加えています。新たに設けられた建築空調のセッションは、17件の発表があり当初の意図はある程度、達成されたものと考えています。2007年の年会で募集されたオーガナイズドセッション名と、オーガナイザーは、以下の様になっています。

- (1) 移動床の流体力学 関根正人(早稲田大)
泉典洋(北海道大)
- (2) 宇宙流体 松田卓也(神戸大)
松元亮治(千葉大)
- (3) エネルギー変換・流体機械 鹿園直毅(東京大)
妹尾茂樹(日立製作所)
- (4) 沿岸域の流れと物質循環 中村由行(港湾空港技術研究所)
武若聡(筑波大)
- (5) 風工学 持田灯(東北大)近藤裕昭(産総研)
中藤誠二(関東学院大)
- (6) 河川・湖沼・地下水の流れ 細田尚(京都大)
内田洋平(産総研)
- (7) 境界層・せん断流・遷移 高木正平(JAXA) 加藤琢真(東北大)
関下信正(豊橋技科大)
松原雅春(信州大)
辻義之(名古屋大)

- (8) 空気力学・高エンタルピー流
麻生茂(九州大)
- (9) 建築空調
近藤靖史(武蔵工大)
倉淵隆(東京理科大)
- (10) 混相流
土屋活美(同志社大)
藤原暁子(東京大)
- (11) スポーツ流体
伊藤慎一郎(防衛大) 瀬尾和哉
(山形大) 浅井武(筑波大)
- (12) 生物流体・生体流体
望月修(東洋大)
高木周(東京大)
- (13) 船舶・海洋工学
柏木正(九州大) 木下健(東京大)
- (14) 騒音
加藤千幸(東京大)
飯田明由(工学院大)
今村太郎(JAXA)横川謙(JAXA)
- (15) 大気・海洋・惑星の流れ
新野宏(東京大) 和方吉信(九州大)
中島健介(九州大)
- (16) 対流
上野一郎(東京理科大)
塩見淳一郎(東京大)
- (17) 津波・海岸災害
富田孝史(港湾空港技術研究所)
越村俊一(東北大)
- (18) 都市・ヒートアイランド
大岡龍三(東京大) 日下博幸(筑波大)

5 要旨集

年会の要旨集は、前年 2006 年の要旨集に対する議論を受けて作成しております。これは、1 ページのアブストラクトを納めた冊子集と、標準 4 ページ、最大 10 ページまでの要旨を納めた CD-ROM を作成するというものです。最大 10 ページの要旨は、要旨と言うよりは論文そのものという議論が成り立つかとも思われますが、あくまでも年会における口頭発

表の趣旨を掲載した資料であり、いわゆる印刷論文として発表されるものではないという立場です。しかしながら、参加者からは、CD-ROM 版の要旨集に掲載される図などが、公表された図となり、もはやオリジナル論文として使用できないとしている海外での例があるとして、1 ページのアブストラクトのみの掲載として CD-ROM 版の要旨集への掲載を遠慮したい旨の意見がありました。このような制度が、海外の流体力学関係の集会や、他分野の国内外の学会であることは、実行委員会内部でも認識されています。これは、逆にどのような形式であろうとも一度発表された図や文章のオリジナリティを尊重する趣旨と思われそうですが、その採用は現行の年会での発表様式を大きく変更することにつながります。2007 年の年会ではとりあえず 2006 年に変更されたばかりですのでその方針を継続するというので、前回通りの要旨集の体裁を取りました。CD-ROM 版の要旨集を作成するか否かに関しては、先にも述べましたように年会のあり方を大きく変更するものになります。来年度以降の年会で十分な議論がされることを期待しております。

6 まとめ

最初にも述べましたように、2007 年の年会も参加者、発表件数の数字的には順調に行われました。この傾向は、ここ数年変わることなく続いており、来年の年会は流体力学会の 40 周年記念の神戸で開催される年会となることもあり、盛会は疑いないものと思われます。

最後に今回の年会開催運営に大きく貢献された実行委員の皆様へ深く感謝いたしますと共に、これを支えてくださった会員の皆様に御礼を申し上げてまとめとさせていただきます。ありがとうございました。